

2018年度第1回SGH連絡会

第2部 第8分科会 IB校連携事例

IB校としてのSGHの取り組み
多文化共生社会を支える
組織力・対話力・実行力の育成



2018年6月29日
東京学芸大学附属国際中等教育学校

本日の説明概要

- 1) SGH指定校・IBDP校となるまで
- 2) SGH研究開発とIBの学び
- 3) 本校のSGH研究開発
課題研究の強化と深化/評価
- 4) カリキュラム編成
- 5) 「SGH×IB」で見えてきた成果

1) SGH指定校・IBDP校となる まで

2007年 東京学芸大学附属国際中等教育学校開校
(附属大泉地区での附属学校の統合・再編)

* 大泉地区＝「帰国生」教育の伝統

* 新たに国際バカロレアMiddle Years Programによる
教育を開始

2010年 国際バカロレアMYP認定校

2011年 ユネスコスクール加盟校

2013年 国際バカロレア日本語DP(Diploma Program)
連絡協議会主幹校

SGH指定校・IBDP校となるまで

- 2014年 国際バカロレアDP候補校
- 2014年 スーパーサイエンスハイスクール
(SSH)指定校
- 2014年 スーパーグローバルハイスクール
(SGH)アソシエイト校
- 2015年 スーパーグローバルハイスクール
指定校
- 2015年 国際バカロレアDP認定校



同じ時期に
認定された

本校におけるIBMYPとDP

1年～4年
生徒全員
(学年平均120名)
がMYPで学習



DP履修者(学年15名程度)
* クラス制ではない。
* HRは一般生と混合

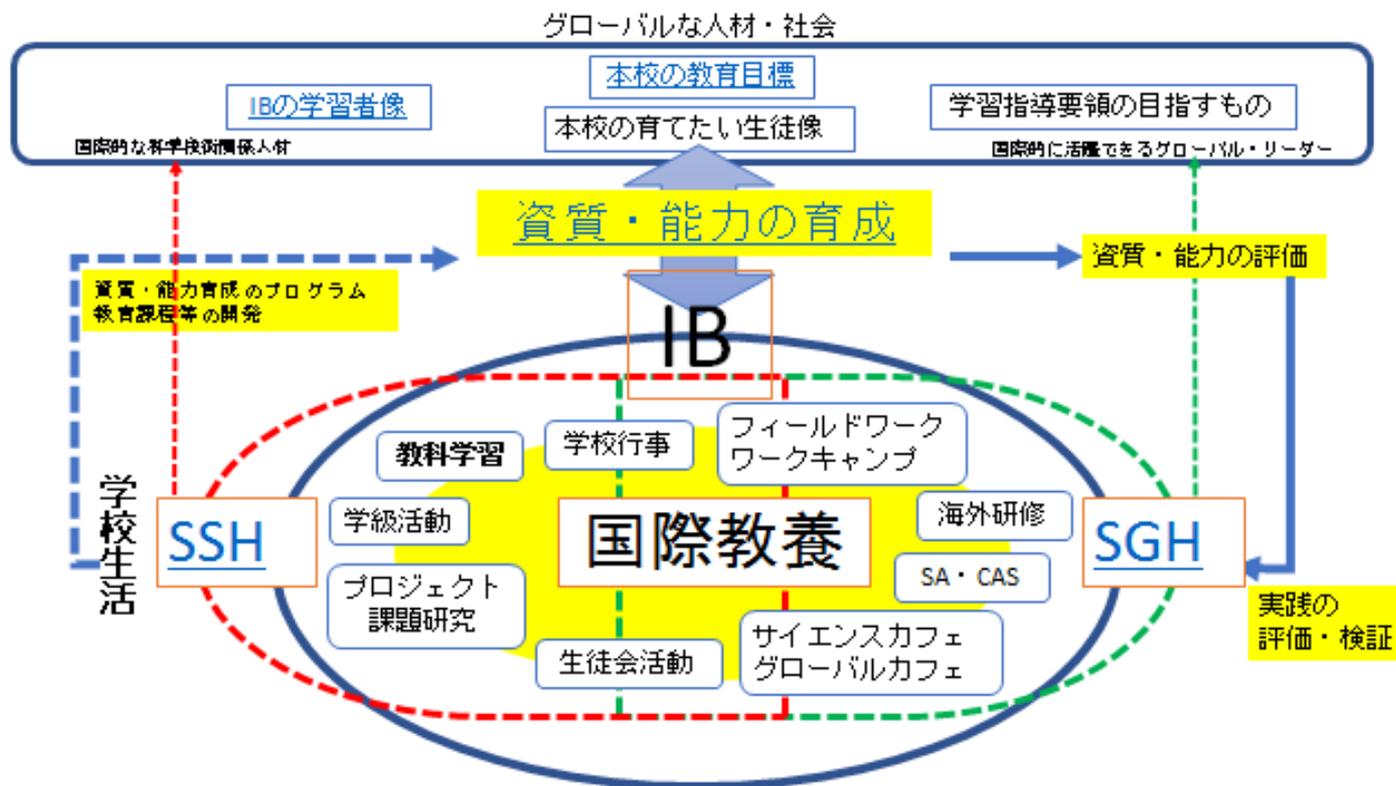
一般プログラム履修者
(学年平均110名～120名程度)

前期課程(中学校課程)
1年～3年

後期課程(高校課程)
4年～6年

2) SGH研究開発とIBの学び

学校の研究開発全体像(図)



生徒・教員共有本校「課題研究ガイド2018-2019」より

SGH研究開発とIBの学び

オリジナル「課題研究ガイド」による理念と方針の共有



TGUISSにおけるIBの教育プログラム



ISSでは1-4年でMiddle Years Programme(MYP)。

5-6年一部の生徒対象でDiploma Programme(DP)を実施しています。

すべてのIBプログラムは、国際的な視野を持つ人間育成を重視し、

人類に共通する人間らしさと地球を共同で守る責任を認識し、

平和でよりよい世界の構築に貢献する人間を育成します。



<who> IBの学習者

● **生徒中心の教育**
生徒はそれぞれの学習スタイルや習性、経験的知識、その生徒も、世界や自分自身の居る場所について、それぞれの考え方や知識、経験をもとに学びの機会を分かち合っています。IBは、偏見と差別の感情に基づく開かれたコミュニケーションを奨励し、積極的に、そして共有することをもって生徒のたつたて学び続けるよう生徒に求めかけています。

● **「IBの学習者像」**
IBの理念を行動として表したものです。IBの学習者は、「探究する人」「知識のある人」「考えの人」「コミュニケーションができる人」「倫理観のある人」「心を開く人」「思いやりのある人」「助け合う人」「力をつける人」「仮の返りができる人」になることを目指します。

● **国際的な視野**
このよふな人物像は、知的成長や学習内容への関心を深めて、人類としての幅広い能力と責任を適切に引き継いでいます。

<how> IBの学び

IBにおける「探究」と「学習」では、意味を構築し、世界を体験するために人々がさまざまな方法で協力し合うことを重要なものとして捉えています。



探究すること（探究）、実行に際すこと（行動）、考えること（仮の返り）の相互作用を通じて、さまざまな見方やもの見方が生み出される開かれたプロセスを重視します。IBの教育は、学習者が自分で、または他の人々と協力して生涯学び続けるための力を引き出します。



<why> 学ぶ理由

IBプログラムは、急速に変化し、多岐にわたる機会が合った世界で、グローバルな文脈に基く国際的な視野の育成を重視しています。グローバル化と多文化共生の精神を通じて、よりよい、より平和な世界を築くことに貢献する。探究心、知識、思いやりを兼ね備えた学習者を育てることを目的とする「IBの使命」は是れです。

<what> 学ぶ内容

● **概念的な学習**
概念は国や文化の境界を越えられるものであふ溢る人。概念的な学習は理科学習の過程を深め、他種な考え方の視点を養い、学習内容を新たな文脈に適用するの機会を促します。

● **教科に関連する学習内容**
生徒は同時並行的に多くの教科の学び、さまざまな見方の見方で概念に取組まれます。また、多岐にわたる分野の知識や経験を積極的に活用する機会を学び、それについての議論を深めます。実践的な学習を通じて、教科の枠にとらわれず世界について学ぶる機会を提供しています。

SGH研究開発とIBの学び オリジナル「課題研究ガイド」による理念と方針の共有

TGUISS における

SSH プログラムと課題研究

平成 26 年度から平成 30 年度までの 5 年間、ISS は Super Science High School の指定を受け、グローバルに活躍する科学技術人材の育成をめざした理数教育の開発研究に取り組んでいます。SSH 事業では、最先端の理数教育の開発・実践だけでなく、生徒が主体的に力づく「課題研究」が重視されており、その活動を通して科学的手法を用いた科学研究を遂行するのに必要なさまざまな能力を身につけることで、研究者であったり最先端科学的に造詣が深い市民として必要な姿勢や能力の育成をめざします。



<Aims>

国際社会で活躍する科学技術人材に求められる「課題発見力」「情報収集力」「分析・評価力」「コミュニケーション力」「自律的活動力」の育成

ISS の SSH 事業では、IB の趣旨にもとづく理数探究教育プログラムを実施することで、「課題研究」に必要な 5 つの能力を身につけるとともに、生徒の「課題研究」そのものの実践を通してそれらの能力のブラッシュアップをはかります。

「課題発見力」- 知的好奇心にもとつき身近な事象や問題から研究課題を見出し、研究対象として課題設定する力
「情報収集力」- 先行研究や資料を調査し、研究方法の設定や問題の解決に有益な情報を収集する力

「分析・評価力」- 実験や調査から得られたデータを分析して有効な情報を得る力。そのデータや情報およびその手法の妥当性や有効性を適切に評価する力

「コミュニケーション力」- 研究活動におけるスムーズな協働を成立させる適切な表現力、および適切な学術的表現を用いて研究成果をまとめ表現する力

「自律的活動力」- 研究目的に応じて適切に計画し、状況に応じて省察と修正を行いながら、自律的に研究活動を遂行する力

<what > 課題研究のめざすところ

SSH では次のような課題研究をめざします。

☆科学的・学術的が優秀な研究

科学研究の方法（調査・実験・分析）が科学的・実証的で秀逸な研究

☆社会的影響のある研究

実用性のある研究で、実社会（国際的視点も含む）で活用したり応用・発展が期待できる研究

☆独創的な研究

研究テーマや研究方法が独創的であるなど、アイデアや発想がユニークな研究

☆革新的な研究

新奇性があり従来の科学研究の発想でははかれない超越した研究

<how 1 > SSH プログラムでの課題研究

ISS のがキエムにおいて「課題研究」は、後期課程では「国際教養」の時間に位置付けられており「パーソナルプロジェクト（4 学年）」「課題研究 I」（5 学年）」「課題研究 II」（6 学年）」として展開しています。前期課程では「理数探究（1 学年）」や「国際教養（2・3 学年）」において、学年ごとの課題設定に応じて「課題研究」を遂行する力を身につけるための理数探究プログラムが用意されています。

また、「科学」「科学技術」「数理学」などに関わる内容であったり手法が科学的である「課題研究」に対して、SS 理数探究などを通して、さまざまな研究支援を行っています。

<how2 > SS 理数探究による研究支援

SSH ではみなさんの「課題研究」を効果的に支援するために次のようなプログラムを用意しています。

◇ISS チャレンジ

優秀な研究を褒賞するだけでなく、コンテストのスケジュールに合わせて研究を進めることで研究活動のタイムキーパーとして自律的活動力を支援します。

◇SS 理数探究 Extra

ISS の卒業生を中心とした研究支援員が皆さんの研究活動を支援します。

実験などに必要な実験器具や消耗品等を支援します。（ISS チャレンジにエントリーする必要があります）

◇サイエンスセミナー・フィールドワーク

学術的なテーマから身近な問題まで、さまざまなアプローチで皆さんを科学の世界へ誘い、課題発見力を高めます。

◇研究交流プログラム

台湾 IB 校（義大國際高級中学）や海外 SSH 校（Phillips Exter Academy, Burnaby South Secondary School）などの国際研究交流。

各種 SSH 指定校合同発表会（全国・関東近県・東京都・都立戸山）および企業等の団体が主催する研究発表会に参加することで課題研究をブラッシュアップします。

TGUISS における

SGH プログラムと課題研究

ISS は平成 27 年度から Super Global High School 指定校となっています。SGH 事業は 5 年間の指定ですので、平成 27 年度から平成 31 年度までプログラムが継続します。SGH 指定校の生徒は「課題研究」を通じて様々な社会課題の解決について考えたり、国内外のフィールドワークにおいて調査活動・検証活動を行った上で、グローバル社会で生きるための資質・能力を身につけることをめざします。



<Aims & Competency>

多文化共生社会を支える「組織力」「対話力」「実行力」の育成

本校が SGH 事業を通じて目指す 3 つの力は、いずれも教育目標や生徒・IB の ATL スキルなどと重なるものです。
*「組織力」- 課題解決のために、人・知識・技術を構成・組織し、物事を動かす力
*「対話力」- 課題解決のために、人・組織等と対話し、合意形成を為す力
*「実行力」- 課題解決のために実際にアクションを起こし、解決に導く力

<who> 後期課程の生徒全員 + ISS チャレンジに参加する前期課程生徒が対象

「課題研究」に取り組むのは、本校の後期課程の生徒全員となります。また前期課程であっても、課題研究に取り組みたい生徒には「ISS チャレンジ」という校内コンペティションの機会が設けられています。ぜひあなたもチャレンジを！

<how2 > SGH の学びの機会

SGH の課題研究をより高度なものにするために、本校では多様な機会を設けています。

- 1 国内研修・海外研修（名古屋・神戸・イリス・フィリピン）
 - 2 国内交流・海外交流（関西地区・中国地区・関東地区・アジア・アフリカ）
 - 3 課題研究支援セミナー
 - 4 Global Café
 - 5 ISS チャレンジ
- 皆さんの周りにはいろいろなチャンスが待っています！特に研修や交流活動は課題研究のためだけでなく、多くの友達を作り、情報を共有するネットワークを作ることにもなります。こうした色々な学びの機会を活用することで、皆さんは自らの「知」を統合していくことになります。

<how 1 > SGH プログラムでの課題研究

本校のがキエムでは「課題研究」は「国際教養」という領域の中に設定されています。4 年次前半は IB のパーソナルプロジェクトを実施します。4 年次後半から 5 年次は「課題研究 I」・6 年次は「課題研究 II」で研究活動を行います。課題研究を通して「課題発見」「課題設定」の力や「調査」「検証」といった活動の仕方、「分析・考察」の方法などを学びます。また、調査や検証をするに際しては、校内だけでなく校外の人や組織と連携すること—外部連携を強く勧めています。

外部の人や組織とつながり、そこで得た知識や情報を自分の研究にフィードバックすることで研究を見直し深めたりすることが重要です。また、研究の成果を実行に移したり、社会へ発信することも皆さんの「実行力」を伸ばすために大切なことです。

<what > 学ぶ内容

● 課題研究の大テーマは「リスク」「葛藤」と「教育」の 3 つの概念

SGH 分野で課題研究を行う場合は、3 つの大テーマと関連付けて、自分で具体的な研究課題を設定することが大切です。「リスク」「葛藤」と「教育」は現在の世界で起こっている重大な問題を見きわめるためのキーワードです。そして「教育」はそうした課題の解決を考えるための重要なキーワードです。

● 教科に関連する学習内容

SGH の学びは様々な「知」の統合を図っていくということでもあります。皆さんが教科で学習する内容は多くが「課題研究」につながってきます。例えば前期課程の「国際教養」領域や、後期課程の「Global Issue」/「国際 A/B」といった科目は、SGH の研究と密接につながっています。

SGH研究開発とIBの学び

IBの学びのKey Word

- 「Holistic」
- 「Interdisciplinary」
- 「Inquiry」
- 「Asking/Thinking/Doing」
- 「Global Context」
- 「Concept」

SGHで育成する資質・能力
多文化共生社会を支える
組織力(知を統合する力)
対話力(対話の中で本質的な問題を探る力)
実行力(主体的に働きかける力)

SGH課題研究の大テーマ

「リスク」 (Risk)
「葛藤と軋轢」 (Dilemma・Conflict)
「教育」 (Education)

SGH研究開発とIBの学び

IBMYP

教育の基盤:「理念」「指針」「フレームワーク」

探究的な学びを実現するための方向性

教育課程・学習指導内容形成のための枠組み

SGH研究開発

IBの理念や方針を基盤とする

探究的な学びをどのような実践によって組み立てていくかを考える

＝実践的教育研究開発

3) 本校のSGH研究開発 ⊖ 当初構 相

多文化共生社会の実現を支える組織力・対話力・実行力の育成

組織力：課題解決のために、人・知識・技術を構成・組織し、物事を動かす力

対話力：課題解決のために関わる人・組織等と対話し、合意形成を為す力

実行力：課題解決のために実際にアクションを起こし、解決に導く力

東京学芸大学附属国際中等教育学校

TOKYO GAKUGEI Univ. International Secondary School

国際教養の複合的課題研究
 <大テーマと研究課題例>
 ■リスク(例:メディアによる世界の分断は何をもたらすのか)
 ■葛藤と軋轢(例:紛争解決の未来とは)
 ■教育(例:IT環境の整備と教育は、地域の子どもにどのような未来を与えるか)

SGHAct(学校外活動の単位認定)

基礎教養としての教科学習と多教科連携

海外ワークキャンプにおける現地高校生との共同探究・国内外調査フィールドワーク・プレゼンテーション・ディスカッション

国際教養の体系化による概念による焦点化



生徒主体の研究体制

- ・チームSGH結成
- ・生徒による課題研究テーマ・企画提案・グローバルカフェ運営
- ・生徒自身が大学・研究室・企業・組織と交渉にあたり、各組織と新たなチームを組む
- ・生徒発案の授業A&S(Act & Solve)の導入
- ・学校外での主体的な活動推進(SGHActとして単位認定)



連携・評価

連携・評価

実行力

ISS生徒

組織力

対話力

国内大学・海外大学

研究課題の共有・共同研究

大学側からSGHActの評価

Pre-SGU: 大学研究につながる学び

SGU: 東京外国語大学との連携
 ハーバード大学学生団体との連携

企業・国際機関

国際的課題の共有・情報提供

指導・助言

共同研究企画開発

企業や組織からのSGHActの評価

本校のSGH研究開発③

課題研究

- 課題研究＝原則として「国際教養」（「総合的な学習の時間」）で実施・3年間の継続的体系を目指す

＝4年（高1）次IBMYPのパーソナルプロジェクト（PP）を「課題研究」の基礎期とし、3年間の段階的・継続的な体系を設計

＝全員が3年間「課題研究」に取り組む（但しDP生は教育課程内ではTOK）

- 課題研究の強化・深化のための仕掛け

＝教科との連動

新たな科目設定・教科学習の指導内容との連携

→教科学習の強化・深化という相互還元

＝全校的課題研究コンペティション「ISSチャレンジ」の開催

→「やらされる」のではなく「意志とやる気をもってやる」研究へ

本校のSGH研究開発③

課題研究

- 課題研究と連動する取り組み

- 課題研究外部評価会
- 課題研究支援セミナー
- Global Café
- 国内研修・国内校との交流・ワークショップ
- 海外研修・海外校（IB校・大学を含む）との交流・ワークショップ
- 他校を招聘しての「SSH/SGH合同生徒課題研究成果発表会」の開催（主催）
- 外部発表機会（シンポジウム・フォーラム・コンテスト・学会発表など）への参加
- 大学・企業との外部連携
- 大学模擬授業（夏季：学芸大約15講座／冬季：外部の大学を15講座）

課題研究支援セミナー

2018年度第1回 国境なき医師団 財務担当

野坂さんによる講義

大テーマ<リスク>

講義テーマ

「南スーダンでの国境なき医師団の活動と役割」

講義と関連する学問領域

国際理解・人道支援・紛争・保健衛生
・医療・環境・マネジメント・経済等

講義に参加した生徒の研究テーマ(分類)

- ・移民受け入れと外国人労働者支援
- ・安全保障(米軍基地問題)
- ・難民支援
- ・食糧生産と流通のロジスティクス改善

等



海外フィールドワーク

• 香港研修

香港中文大学でのワークショップ

自分たちの課題研究についてプレゼンテーション

それを踏まえた香港中文大学の学生とのディスカッション

チャレンジングな問い

大テーマ<葛藤と軋轢>

「雨傘運動」についてどう思っていますか？その時どうしていましたか？

民主化弾圧への思想が強く反映されているような表現は香港ではどのように扱われていますか？



本校のSGH研究開発⊗ 評価

◆課題研究の評価

- ・ルーブリックによる評価
計画・経過・最終成果(論文)の3段階。
ルーブリックを用いて生徒の自己評価・教員による客観評価を実施している。
- ・ポートフォリオ評価(ISSチャレンジ参加生徒)
計画書や最終論文だけでなく、研究のプロセスを評価する対象として研究ノートを作成・提出。
研究ノートもルーブリックを用いて評価する。

本校のSGH研究開発⑥ 評価

ルーブリック評価

IBMYP・IBDPのルーブリックを参照しながら、
本校独自の課題研究に応じた妥当性・信頼性の
あるルーブリックになるよう改善・改訂を繰り返して作成。

ルーブリック評価の良さ

課題研究に必要な要素を生徒と共有できる。

求められるレベルが明示される。

観点を整備することで生徒を多角的に評価できる。

計画や論文の評価に関しては、教科との連動・共有も可能。

→しかしルーブリックには限界も。

本校のSGH研究開発ⓧ 評価

- 大切なのは教員によるコメント・フィードバック・外部評価によって、生徒が「振り返りと改善」のサイクルを実行すること。
- 「ISSチャレンジ」の評価分析による結果
ISSチャレンジでの校内評価上位層
＝内部・外部の評価や外部連携をうまく活用し、自分の研究をメタに認知し、研究や活動の修正と改善をおこなっている。

本校のSGH研究開発[Ⓜ] 評価

資料 IBMYPの観点

国語科	社会科	数学科	理科	外国語科
Analysing 分析	Knowing and understanding 知識と理解	Knowing and understanding 知識と理解	Knowing and understanding 知識と理解	Comprehending spoken and visual text リスニング
Organizing 構成	Investigating 調査探究	Investigating patterns パターンの探究	Inquiring and designing 探究とデザイン	Comprehending written and visual text リーディング
Producing Text 創作	Communicating コミュニケーション	Communicating コミュニケーション	Processing and evaluating 手法と評価	Communicating in response to spoken and/or written and/or visual text コミュニケーション
Using Language 言語の使用	Thinking critically 批判的思考	Applying mathematics in real-life contexts 実生活への応用	Reflecting on the impacts of science 科学による影響の振り返り	Using language in spoken and/or written form 言語の使用

PP
調査 investigating
計画 Plannning
行動 Taking Action
振り返り Reflecting

PPはもちろんであるが、教科の観点も課題研究との相関・連動が見られる。

本校のSGH研究開発[Ⓜ] 評価

資料 一般PGの観点

国語科	地歴・公民科	数学科
知識・理解	知識と理解	知識・技能
分析	応用と分析	プロセスと振り返り
構成	知識の統合	数学的コミュニケーション
言語の使用		学習への取り組み
理科	外国語科	情報科
知識と理解	リスニング	探究と分析
探究	リーディング	アイディアの発展
実験観察の技能	コミュニケーション	課題解決
データ処理	言語の使用	評価
評価		
科学による影響の振り返り		(*「情報の科学」は4年次開講)

SGHとATL

IBMYPのATLスキル

(Approaches To Learning Skills)

→SGHの学びによってどのようなスキルが身に付いたかの検証に活用

ATLスキルのカテゴリー	MYPのATLスキルクラスター
コミュニケーション	コミュニケーションスキル
社会性	協働スキル
自己管理	整理整頓する力
	情動スキル
	振り返りスキル
リサーチ	情報リテラシースキル
	メディアリテラシースキル
思考	批判的思考スキル
	創造的思考スキル
	転移スキル

4) カリキュラム編成



第4学年 (2016年度)

国語		地理・公民		数学		理科		保健体育		外国語		芸術		情報		国際教養・外国語		H R	スポーツ
国語総合		現代社会	地理A 地理A(IM)	数学I	数学A 数学A(IM)	生物基礎 生物A(選択IM)	地学基礎	体育	保健	コミュニケーション 英語I	英語表現I 音楽I 美術I 書道I	情報の科学		GI 英語以外の 異語	国際4	1	1		
4		2	2	3	2	2	2	2	1	3	1	2	2	2	1				

「地理A」、「数学A」はイメージ授業の選択も可能です。「科学と人間生活 (IM)」はイメージ授業として開講します。



第5学年 (2017年度)

※ DP生は別のカリキュラムになります

国語		歴史		数学		数学・芸術		理科		保健体育		家庭		外国語		国際教養・理科 外国語・情報		H R	
現代文B	古典B	世界史A 世界史A(IM)	日本史A	数学II	数学B 数学B(IM)	音楽II 美術II 書道II	物理基礎	化学基礎	体育	保健	家庭基礎	コミュニケーション 英語IIa	コミュニケーション 英語IIb	英語表現I	GI 英語以外の 異語 インフォマティクス 生物IM	国際5	1		1
2	2	2	2	4	2	2	2	2	1	2	2	2	1	2	2	1			

「世界史A」、「数学B」はイメージ授業の選択も可能です。「生物IM」はイメージ授業として開講します。



第6学年 (2018年度)

体育		コミュニケーション 英語Ⅲ総合		英語表現 Ⅱ総合		現代文B		古典B		英語表現 Ⅱ演習		世界史B② 日本史B② 地理B②		国際A 古典A(古文①) 古典A(古文②) 国際B		古典A(古文①) 古典A(古文②) 国語表現① 政治・経済① 数学特講b		世界史B① 日本史B① 地理B① 音楽Ⅲ 美術Ⅲ 書道Ⅲ		倫理 政治・経済②		国際6	H R				
3		2		2		2		2		2		4		2		2		2		2				2		1	1
		数学特講IM		物理IM		日本語理解		物理 化学①		化学② 生物 地学 地学基礎		数学Ⅲ		数学特講a													

「数学特講IM」、「物理IM」、「政治・経済IM」はイメージ授業として開講します。

カリキュラム編成

本校の姿勢

生徒は責任をもって自分の学びを構築する

・ ・ ・ 主体的に学ぶことが責任を伴うことであることを学ぶ

— 選択科目の多様性

— 生徒は自分で自分の時間割を作る

— 100人いれば100通り

(実際は100通りもありませんが)

— 空き時間もある

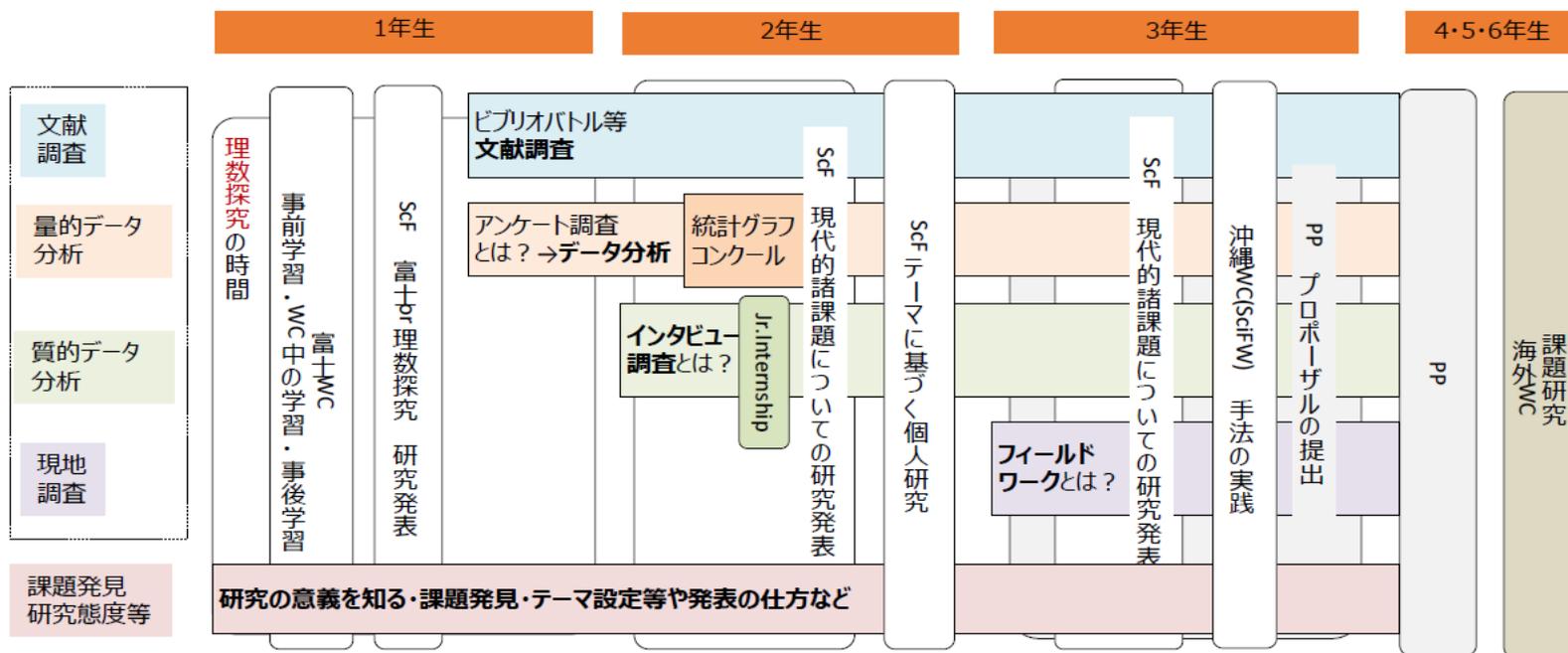
→ 課題研究の研究時間に使用することも多い。

課題研究のカリキュラム編成

「国際教養」の体系化

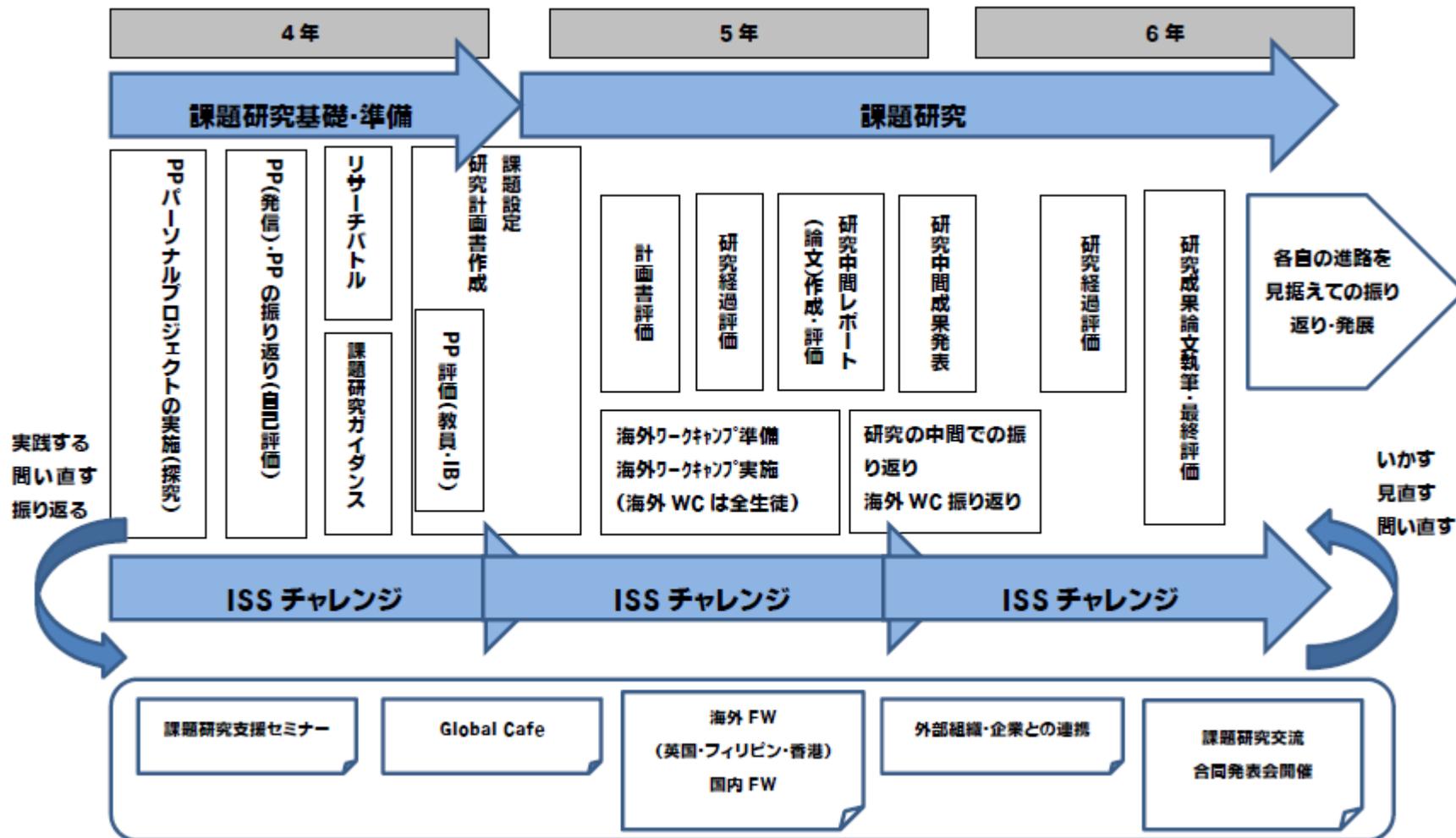
前期課程の3年間も含め、後期課程で「課題研究」を継続的に実施するための体系を整備

指導モデル（前期課程）



課題研究のカリキュラム編成

課題研究 指導モデル（後期課程）



生徒の研究活動を単年度ではなく、3年間継続するものという前提で設計。
原則として4年次後半で設定した個別の研究主題を変更せずに4年～6年まで研究する。

課題研究ガイダンスの重視

3年次PP実施前にも行うが、4年次PP終了後に再度課題研究ガイダンスを実施

なぜか？

- 学術的価値のある研究を目指す
- MYPの集大成としてのPPではあるが、再度<研究>という面に焦点をあて、PPの反省を踏まえて

「調査」

「量的分析方法」 「質的分析方法」

「現地調査の方法」

「研究倫理」 (→IB教育においても重視される)

という研究の基礎教養と論文執筆方法について見直し、再確認する機会とする

学校設定科目と課題研究

- ・ 外国語科科目で本校の「国際教養群」に含まれている科目

4年次・5年次開講

「Global Issues」（年度ごと2単位）

「英語以外の外国語：独語・仏語・西語・中国語・韓国朝鮮語」（年度ごと2単位）

- ・ 情報科の学校設定科目

5年次開講

「Informatics」（2単位）

学校設定科目と課題研究

学校設定教科「国際」

6年次 学校設定科目「国際A」「国際B」

国際A(2単位)開講講座

- ・「憲法と人権」
- ・ 「国際協力と社会貢献」

国際B(1単位)開講講座

- ・「文学探究」
- ・「応用数学」
- ・「AP Tutorial」

- ・ 「ファシリテーション実践」

下線の2講座はSGH指定と同時に開講

5) 「SGH×IB」で見えてきた成果

「探究的な学び」は、何によって促されるか

- ① 常に「本質的な問い」が授業で投げかけられる。
- ② 自分の問題意識が尊重され、課題として設定し研究できる環境が与えられる。
- ③ 多面的で複数回にわたる評価がなされ、教員や外部からのフィードバックが提供される。
- ④ 「つながり」や「連続性」のある学びが意識される。

「SGH×IB」で見えてきた成果

「社会課題」への関心の高まり
→大テーマへの意識の変容から見える。

IBの理念 「よりよい社会・より平和な世界を築くことに貢献する若者を育てる」

* 意識の変容調査結果 *

自分の研究課題と大テーマとの関連

(複数回答可としています)

「リスク」 =前年度比 1.51倍

「葛藤と軋轢」 =前年度比1.54倍

「教育」 =前年度比1.24倍

「SGH×IB」で見えてきた成果

進路についての考え方への影響

進路そのものへの影響

＜顕著な変化＞ 調査対象 後期課程(4年～6年):全生徒

・大学院を含めた海外進学 of 意志を持つ生徒の増加

指定1年次 28名 → 指定3年次 72名

・将来海外で働きたいという生徒の増加

指定1年次 77名 → 指定3年次 105名

「SGH×IB」で見えてきた成果

- ・海外大学進学者の増加

合格数：30大学・33人

進学者数：13名

- ・海外大学進学者向け奨学金獲得数の増加

JASSO 日本学生支援機構海外留学支援制度： 6名

グローバルバンクロフト奨学金： 2名

柳井正海外奨学金プログラム： 3名

- ・上記進学者の内

- ・ SGH分野での課題研究を行った者

- ・ SGH研修参加者

- ・ SGH高大連携事業の経験者

： 10名（DP生で研究活動を行った者を含む）

「SGH×IB」で見えてきた成果

ほかにも・・・

- ・国内のIB校や候補校はSGHであることが多い
→ネットワークの重なりと緊密化
- ・IB校ネットワークが活用できる
→海外のIB校と連携し、課題研究を軸とした研修が可能（特にカナダ・バンクーバーネットワークキャンプ）

今後の展望

- ・ 「課題研究」から「課題解決実践」への
ルートマップ構想

生徒の主体性を活かすエンパワーメント

- ・ グローバル企業や海外大学と連携した教育プログラム開発

<既に少しずつ動き始めているものも・・・>

Microsoft・team lab・ミシガン州立大学

- ・ 国内外の研修プログラムの体系化

単発研修に終わらない連続性と継続性を持った設計

TGUISS SGHの活動の様子 は . . .

本校SGH webサイト

<http://sgh.iss.oizumi.u-gakugei.ac.jp/>

本校SGH Facebook

<https://www.facebook.com/tguiss.sgh/>